

白山ふるさと文学賞

第八回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 最優秀賞

支えてくれた人達に感謝

鳥越中学校三年

黒川くろかわ

心愛み

泣き虫だった私を強くしてくれた。最後まであきらめず勝ちとるうれしさや楽しさ、自分を応援し戦ってくれる友達との出会い。わがままな自分についてくれる先生や家族と絆を深めることができた。

「やってみたら？」

母の一言で私はたくさんの人と知り合い、自慢できる特技、空手と出会った。

最初は父と兄が習っていたのを暇つぶし感覚でついていく程度だった。楽しそうにしている時もあれば、泣きながら練習に励む兄を見ていると、自分には絶対に来ないなと思っただけ、まさか自分が必死に取り組んでいくことになるとは思ってもしなかった。

やり始めた頃は、友達がいなかったことや、自分だけわからない、出来ないことが多くて、泣きながら稽古をしていた。つらいことや怒られることが嫌になり、空手を習ったことを後悔したこともあった。ずる休みもたくさんした。それでも、空手を始めようと決めたのは自分だったことや、自分の後から入ってきた子に抜かされていくことが嫌で、嫌々ではあったものの稽古には必ず行くようになった。やがて、大会にもたくさん出て、勝つことのうれしさや、他道場に友達もできたので、空手が楽しくなっていた。

そんな時、私の一番のライバルが現れた。それは弟だ。自分とは違い、弟は0歳の頃から稽古を見て、見様見まねで形を打っていたし、運動神経がよかったので、始めた頃から何でもこなしていた。私も姉として、弟よりも下手と言われることが嫌で、前よりもたくさん練習するようになった。弟は先生の話聞いて、すぐに技を直すなど、私よりも優れているところが多くあった。私の方にまだまだだな、と思うことがたくさんあったが、やはり弟に負けたくなくて、真面目に練習に取り組むようになった。二人で切磋琢磨し、実力を付けていく中、私が中学一年で弟が小学校三年の時、弟が世界大会に出場することになった。自分よりも先にJapanを背負った弟がカッコよくて誇らしい反面、どんどん置

いていかれるように感じて、とてもつらかった。空手を始めて一番伸び悩んでいた時期でもあり、弟と比べられるのが嫌で、先生の話あまり聞かず、親に口答えし、弟の近くで練習したくないと思ったこともあった。今思えば、無駄な抵抗だったと思うし、努力して差を縮めればよかったとも思う。

弟は世界大会で優勝し、見事に世界一になった。大会までは、自分の情けない態度や、どんどん開いていった実力の差を感じてムカムカした気持ちだったが、弟が泣きながら何度も練習をしていたところを近くで見えていた分、やっとなかなか頂点を間近で見えて、自分のことのようにうれしく思った。とても誇らしかった。一番身近で大切な弟は、私の最大のライバルになった。

その一年後、中学二年の冬に道場が変わり、全国大会出場が決定したこともあって、頑張っていこうと心に決めた矢先、私は腰に怪我をしました。なかなか練習ができなくなった。その代わり、先生から小さい子たちの指導を任せられるようになり、自分が練習するよりも、指導する時間の方が長くなっていった。最初はなかなか思い通りに伝えられないし、教えるうえでわからないことも多くあった。でもそのおかげで、自分の未熟さを改めて痛感し、先生の偉大さに気付くことができた。もっと知識を増やさないと、と思うことが増えた。教えている子たちがどんどん上手くなってきたことや、周りの保護者の方や先生が、「どんどん上手くなっていったらいい。」

と話しているのを聞くと、自分のわかりにくい指導を理解してくれて、がんばろうとしているみんなに感謝をしたし、自分ももっとがんばらなないと、とも思うことができた。

私がこれまでがんばってこられたのは、送り迎えをしてくれて、生意気な自分を怒ってくれた両親や、指導してくれた先生のおかげだと思う。また、仲間でありライバルでもある友達存在がある。みんなとは一緒に練習をしてきた。時には意見の食い違いや小さなことでけんかをたく

さんしたけれど、仲直りをして、誰にも負けない絆を作れたことを本当にうれしく思う。最高の仲間と県一位をつかんだ時は、涙が止まらなかったことを鮮明に覚えている。そして、いつも練習につきあってくれた兄と弟には感謝してもきれない。

泣き虫で、自慢できることがなかった私を、たくさんの方が応援し、共に戦ってくれたおかげで、空手という特技を見つけ、努力することができた。今までお世話になった人たちに感謝し、これからは小さい選手たちの育成と、自分自身の更なる飛躍につなげていきたいと思う。

